

短 報

淡水産紅藻オオイシソウ
Compsopogon coeruleus (Balbis) Montagneの新産地

小林 真 吾*

New locality of *Compsopogon coeruleus* (Balbis) Montagne; freshwater algae, in Ehime Prefecture, Shikoku, Japan
Shingo Kobayashi

ABSTRACT A freshwater algae *Compsopogon coeruleus* (Balbis) Montagne was recorded from Doi town, eastern part of Ehime Prefecture in September 2002. This locality is small creek for use of agriculture, stands by the seaside.

In Japan, *C. coeruleus* is considered threatened species, and anyone has known its late distribution in Ehime prefecture from 1960s.

はじめに

オオイシソウ *Compsopogon coeruleus* (Balbis) Montagne (= *C. oishii* Okamura) (図1) は、紅藻綱オオイシソウ目オオイシソウ科に属する淡水産の藻類であり、日本では主に暖温帯域の低地を流れる小河川や、海岸に近い水路に生育する(熊野, 2000)。開発などの影響で全国的に分布が減少しつつあり、環境省版レッドデータブックでは絶滅危惧 類(環境庁自然保護局野生生物課, 2000)、水産庁によるレッドデータブックでも危急種とされている(水産庁, 1998)。

本種は、1960年代の報告以後、愛媛県内における分布状況が不明であったが、2002年9月に、愛媛県東部の土居町でオオイシソウの生育を確認したので、ここに報告する。

オオイシソウの新産地について

今回オオイシソウが確認された場所は、愛媛県東部の宇摩郡土居町の海岸に近い水路で、西方に並行して二級河川の関川が流れている(図2, 3)。

水路は農業用水の目的で使われていることから手入れが行き届いており、水草はそれほど繁茂していない。水路中に見られる植物はヒルムシロ科のヤナギモが多く、オオイシソウは、これら水中の水草や地上から水中へ垂れ下がった草本類の葉上、水路の躯体など様々なものを基質として生育している。底質は泥質であるが、これら



図1 オオイシソウ *Compsopogon coeruleus* (Balbis) Montagne

に埋没している礫やゴミなども基質となっている。水深は場所によって差はあるが平均で約30cm、水流はやや強く、透明度は底が見える程度である。塩分濃度の計測は行っていない。

水路の下流は潮受堤防背面の水路となり、堤防のすき間から若干の海水が入り込んでいる。このような場所では、ウラギクやハマサジなどの塩生植物のほか、カワツルモなど汽水性の水草が見られるが、オオイシソウの生育はほとんど見られない。なお、同地点で採集した個体は5%ホルマリン溶液に浸し、当館にて保管している(EPSM - AL - 434, 435, 436)。

愛媛県におけるオオイシソウの分布記録

愛媛県では、八木繁一氏(注1)による研究以降、特に淡水産藻類に関する確実な情報が途絶えている状況に

* 愛媛県総合科学博物館 学芸課 自然研究科
Dept. of Natural history Ehime Pref. Science Museum

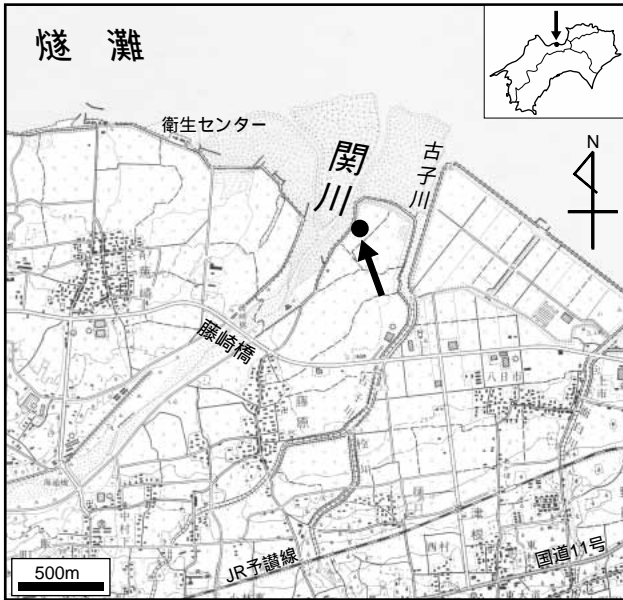


図2 愛媛県におけるオオイシソウの新産地（図中の●）



図3 オオイシソウが確認された水路（2002年9月27日撮影）

ある。オオイシソウの愛媛県内における既知の産地としては、八木（1964）の「松山市余戸」と「新居浜市」、中村ら（長谷井・中村1980；中村，1999）による「松山市」が挙げられる。

八木による報告は、過去に採集された藻類全般の標本目録として記述されたものである。しかし、目録と対照されるべき標本が滅失しているため、現在では産地と採

集年月日の特定が不可能である。また、中村の報告は八木による戦前の採集記録を引用しているが、引用元となっている文献を直接参照する事ができなかったため、詳細な産地の確認は困難な状況である（注2）。以上のような状況から、今回オオイシソウが確認された産地は、現時点において愛媛県唯一の確実な生育地であると考えられる。

オオイシソウの最近の分布記録としては、熊野ら（2002）が日本各地において1995年以降に確認した淡水産紅藻の産地報告が挙げられる。この中では、オオイシソウは青森県から沖縄県にかけて確認されているが、四国では香川県丸亀市の産地が確認されているのみである。同報告で愛媛県内での分布が確認された種は、カワモズク科3種類とタンスイベニマダラのみであった。

おわりに

今回確認されたようなタイプの水路は県内でも各所に見られることから、詳細な調査によってほかの産地が見つかる可能性は高いと考えられる。県内では、オオイシソウ以外にも、湧水や水路、小河川ではカワモズク類が多く生育し、シャジクモ・フラスコモ類も水田や水路、ため池、湧水中での生育が確認されている。これらの藻類は水質の悪化や開発による環境変化の影響で消滅する事例が多く知られており、中村（1996）はオオイシソウ、チスジノリに関する事例を報告している。

現在、愛媛県では県版のレッドデータブックを作成する事業が進展しているが、この中では藻類のカテゴリーはない。海藻類に関しては、近年、越智郡島嶼部の弓削町で積極的に調査が行われている（弓削町，2002）が、淡水藻類についての調査例は県内にはほとんど存在しない。

今後は、本報告の産地を中心にオオイシソウの分布状況の詳細を把握するとともに、カワモズク類など他の淡水藻類も含め、愛媛県における淡水藻類のフロラを早急に調査することが急務である。

謝辞

本稿を報告するにあたり、東邦大学理学部吉崎誠教授には標本の同定と淡水産紅藻の分布状況に関する情報をご教示いただいた。関東地方のオオイシソウに関する文献は、中村武氏と埼玉県立総合教育センターの管野吉雄氏からご恵贈いただき、株式会社内田老鶴園の内田悟氏には文献収集に際しご協力いただいた。また神戸親和女子大の熊野茂教授からは日本国内におけるオオイシソウの分布状況と文献情報を、愛媛県立松山西高等学校の井口数彦教諭には愛媛県内の淡水藻類に関する情報をご教示いただいた。以上の方々にて記してお礼申し上げます。

注 釈

注1：八木繁一（1893-1980）. 愛媛県を代表する博物学者. 愛媛県師範学校, 旧制松山中学（後の松山東高等学校）, 旧制松山高等学校（後の愛媛大学理学部）などで教鞭を執り, 愛媛県立博物館の設立に尽力, 愛媛県内の動植物に関する多くの書物を記した. 愛媛県沿岸域の海藻に関する研究で内外に知られ, 新種の記載も多い. 特に, 温泉郡川内町の「お吉泉」で, 新種の淡水産紅藻オキチモズクを発見したことは有名である.

注2：中村武氏の報告に記載された八木の採集記録は, 神谷平氏による報告が出典としている（中村氏私信）. これは, 神谷氏が1955年に「北陸の植物」第4巻1号に発表された「紅藻類オオイシソウの新産地と分布考察」が情報源と考えられるが, 現時点では直接参照することができなかった. また, 八木の採集記録としては, 大阪府枚方市（1939年）もある. 当時, 八木は愛媛県松山市の愛媛県立博物館に勤務していたことから, これらの情報が錯綜している可能性もあり, 今後の確認を要する.

文 献

- 環境庁自然保護局野生生物課編（2000）：「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 9 植物（維管束植物以外）」. 財団法人自然環境研究センター. p.253.
- 熊野 茂（2000）：「世界の淡水産紅藻」. 内田老鶴圃. pp.33-34.
- 熊野 茂・香村真徳・新井章吾・佐藤裕司・飯間雅文・洲澤 譲・洲澤多美枝・羽毛田岳昭・三谷 進（2002）：1995年以降に確認された日本産淡水産紅藻の産地について. 藻類. Vol.50, 1. pp.29-36.
- 水産庁編（1989）：「日本の希少な野生水生生物に関するデータブック」. 社団法人日本水産資源保護協会. pp.308-309.
- 中村 武（1996）：絶滅の恐れのある植物群の生育状況と保全について. 南教育センター研究紀要, 9. pp.20-23.
- 中村 武（1999）：日本産オオイシソウ科藻類の観察と研究. 「淡水藻類入門」. 内田老鶴圃. pp.395-404.
- 長谷井稔・中村 武（1980）：関東のオオイシソウ科藻類. 遺伝. Vol.34, 8. pp.67-73.
- 八木繁一（1964）：伊予の海藻目録. 愛媛県立博物館研究報告, 4. 愛媛県立博物館. p.17.
- 弓削町（2002）：「弓削の海藻・磯の生物」. 弓削町. 160pp.